ノーモア・ヒバクシャ通信 第 18 号

発行　2014 年 8 月 24 日

ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ　http://www.kiokuisan.jp/

継承ブログ　http://keishoblog.com/

発行者　ﾉｰﾓｱ･ﾋﾊﾞｸｼｬ記憶遺産を継承する会

〒102-0085

東京都千代田区六番町 15 プラザエフ 6F

TEL/Fax　03-5216-7757（直通）

Email　hironaga8689@gmail.com

郵便振替口座　00170-5-694752

（口座名義）ﾉｰﾓｱ･ﾋﾊﾞｸｼｬ記憶遺産基金

★もくじ

Ⅰ．【映像作品】原爆は人間として死ぬことも生きることもゆるさなかった Ｙｏｕ　Ｔｕｂｅ　公開のお知らせ	Ｐ１
Ⅱ．理事懇談会のご報告	Ｐ３
Ⅲ．資料収集作業グループの報告	Ｐ４
Ⅲ．ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐネットワークの報告とお知らせ	Ｐ６
Ⅳ．継承の取り組みのご紹介（第８回）	
（１）東京高校生平和ゼミナール　７/13（日）丸木美術館見学	Ｐ６
（２）ＪＣＣＵ協同組合塾　7/31「ヒロシマ・ナガサキを聴き、語り、受け継ごう」	Ｐ７
（３）Peace Now! Hiroshima 2014　児玉様からの講演を受けて	Ｐ10
Ｖ．≪紹介≫この夏の出版から	Ｐ11

Ⅰ．【映像作品】原爆は 人間として死ぬことも生きることも ゆるさなかった
Ｙｏｕ　Ｔｕｂｅ　公開のお知らせ

ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会と日本原水爆被害者団体協議会は、原爆・核兵器の反人間性を原爆被害者自身が語ったことば（手記、証言）や描いた絵をもとに伝える映像作品、「原爆は 人間として死ぬことも生きることも ゆるさなかった」を完成、７月２０日、You Tube に公開しました。（下記 URL 参照）

来年は被爆７０年、ＮＰＴ再検討会議に向けてわが国には、広島・長崎の原爆被害と被爆者の願いに根ざした、被爆国ならではの核兵器廃絶に向けた主導的な役割が期待されています。そのためにも、この映像作品を多くの方々にご覧いただけることを心から願っています。ダウンロードなど自由にご利用ください。

なお、この映像は、継承する会や日本被団協のホームページからもご覧いただけます。

＊　　　＊　　　＊

【映像作品】**原爆は 人間として死ぬことも生きることも ゆるさなかった**

https://www.youtube.com/watch?v=U73vyLpjPIQ&list=PL4UhoRnxMOGoknoevfjukIgvk0lJ-jT87

被爆者が証す原爆の反人間性シリーズの第１回（４つのパートからなる３６分の作品）

核兵器は人間と共存できない。原爆被害者自身が語ったことば（手記、証言）や描いた絵をもとに、原爆・核兵器の反人間性をシリーズで紹介する。
制作：ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会　http://kiokuisan.com/
日本原水爆被害者団体協議会　http://www.ne.jp/asahi/hidankyo/nihon/

原爆は 人間として死ぬことも生きることも ゆるさなかった　part1/4　17：52

Part1：岩佐幹三さん（広島、1.2㎞で被爆）の証言
母が生きながらにして焼け死ぬのを　見殺しにして逃げた

原爆は 人間として死ぬことも生きることも ゆるさなかった　part2/4　5：58

Part2：越智晴子さん（広島、1.7㎞で被爆）の証言
あの日から今日まで　心と体に重い十字架を背負って生きてきた

原爆は 人間として死ぬことも生きることも ゆるさなかった　part3/4　4：07

Part3：人間にとっての極限状況
「あの日の証言」と被爆者が描いた絵から

原爆は 人間として死ぬことも生きることも ゆるさなかった　part4/4　8：03

Part4：二度とだれにも味わわせたくない

【制作の意図と公開までの経過について】

被爆７０年を目前に、原爆・核兵器の非人道性に着目し核兵器廃絶をめざす国際的な動きが大きく広がってきています。とはいえ、その議論は主に、放射線による後遺症（からだの被害）の持続性や地球環境への影響などに焦点があてられており、未だに人間存在の全局面にわたる被害の全体像について十分に知られているとはいえません。

こうした状況をふまえ、継承する会と日本被団協では昨夏来、原爆の反人間性について被害者自身の立場から内外に広く知らせていくための方法について検討を重ねてきました。
その結果、１）原爆被害者自身の証言（ことば）を中心に、２）映像（動画、静止画を含む）で、３）ＤＶＤや You Tube などで若い人たちや外国の人たちに広く見て、活用してもらえる作品、４）当面は、①着目されることの少ない〈心の傷〉に焦点をあてた３０分程度の作品と、②被害のさまざまな局面に焦点をあてた数多くの短い作品を制作する、という方針を立てて、多くの方々の協力を得て作業をすすめてきました。
（協力者については、Part4 の最後のクレジットをご覧ください。）

今回完成し公開した映像作品は、その第一作（上記４）－①）にあたるもので、今後、ＤＶＤ化、さらには英語版も予定しています。なお、原爆の反人間性を伝える映像作品の第二作以降についても、短い作品を数多く次々にネット上にアップしていきたいと考えており、そのための資料収集も始まっています。

【今回の作品の内容と特徴】

崩壊した家の下敷きになったお母さんを助けられずに逃げた岩佐幹三さん（日本被団協代表委員、１６歳のとき広島（１．２㎞）で被爆）、「一緒につれていって」という３人の少女を途中で見捨ててしまった越智晴子さん（北海道被団協会長、２２歳のとき広島（１．７㎞）で被爆）の２人の証言を軸にして、被爆者の描いた絵や証言を重ねながら、原爆のもたらした〈地獄〉とは、「人間として死ぬことも、人間らしく生きることも許さない」、人間にとっての極限状況であったこと、その体験がいまなお被爆者たちを苦しめつづけていることを明らかにしています。

「ふたたび被爆者をつくるな」、という被爆者たちの願いの底にある、亡くなった人たちを無駄死にさせてはならない、世界中の誰をも被爆者にしてはならない、という思いが深く伝わってくる作品です。

Ⅱ．理事懇談会のご報告

７月１２日（土）午後１時半～4時半、東京主婦会館プラザエフ５Ｆ会議室で
開催された第１回理事会は理事の出席が半数に満たず理事懇談会に切り換えました。討議の主な内容は、**【映像作品】**「原爆は人間として死ぬことも生きることもゆるさなかった」を７月中にYouTubeで公開し会のホームページで紹介すること、また公開に当たってプレスリリースすること。会の紹介パンフを７月に会員と賛助団体に見本と注文用紙を入れてメール便で発送すること。継承センター設立委員会の運営は、検討課題について部会を設けその報告を受け、委員会の討議をすすめること。など意見交換をすすめました
議題は、次の通りです。

（報告事項）
①第２回通常総会報告
②ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐネットワークの報告
③原爆の反人間性レポート及び会の紹介パンフの進捗状況
④第８回国際平和博物館会議での「岩佐代表理事の報告」
（審議事項）
①第１回継承センター設立委員会の報告と討議

Ⅲ．資料収集作業グループの報告

日本被団協の所蔵する被爆者運動資料の整理作業は、昨年につづき、今年も昭和女子大学・人間文化学部歴史文化学科の松田忍先生の指導のもと、夏休みの学生さんらの協力で行われています。

夏休み前半の今回は、７月２７日（日）から８月１０日（日）までの間の８日間に、１～３年の学部生と休日返上でかけつけたＯＧの資料専門家を含む１８人、延べ３７人が参加してくださいました。

作業は終始なごやかに、予想以上のテンポで順調にすすみました。被団協から運び込まれた段ボール６６箱はすべて開かれ、ファイルや封筒にまとめられた資料ごとに一点ずつ封筒に入れて分類し、中性紙でできたもんじょ箱に収めました。それらに番号をふり、目録にとっていくのですが、ホチキスの針やファイルの金具など、錆びついて資料を痛めそうなものは丁寧にとりはずし、プラスティックや紙のクリップで止めなおす、という地道で手間のかかる作業を伴います。

それでも、熱心にとりくんでいただいたおかげで、７０個のもんじょ箱に収められた資料のうち、目録どりはあと、残すところ１０箱足らずとなり、被団協資料の整理はほぼ一段落。これを土台に、夏休み後半には、阿佐谷の資料準備室から１８日に搬入した被爆者やご遺族から提供された諸資料の整理など、次の段階の作業にすすむことができそうです。

今回整理した資料のなかには、トマホーク反対の３人署名や「被団協」新聞への投稿、1977 年のＮＧＯシンポジウム、被爆者要求調査（84 年）、85 年原爆被害者調査などの各種調査、各地の会報など、被爆者のこえに直にふれられるもの、あるいは、被団協が初めて厚生省前に５日間の座り込みをした 1973 年１１月行動関連の資料や衆参国会議員３分の２以上の署名（自筆）、各地の議会決議など、被爆者運動の大きな足跡を示すものも多く、時に手を休めてじっと見入っている姿が印象的でした。

「もっとゆっくり読んでみたい」という人、被爆者の「あの日の証言」を織り込んだ構成劇シナリオをみて、急に泣き出してしまった人。それを隣から「あたしらが変えていこうよ」と励ます同級生。国家補償の援護法制定に賛同する署名簿のなかに海部俊樹（当時の首相）をはじめ安倍晋三、石破茂の名を発見し歓声をあげる人。被爆者のみなさんに見ていただきたいような光景でした。

そんな作業をへて、当初の予定に追加して参加を希望してくださる方が出てきたのも、うれしいことでした。

松田先生が同大歴史文化学科のブログに、この文書整理作業のもようを載せてくださいましたので、ご紹介します。（８月２日付など）

http://content.swu.ac.jp/rekibun-blog/

歴史家の目でみた被団協文書についての見方、評価は、運動の観点からのそれとはまた異なり、とても示唆に富んでいるように思います。最後にその一節を引用させていただきます。

「まだ文書整理会は数回しか開かれておりませんし、被爆者運動を研究しているわけでもない私が、この文書群を専門的に語る資格はありません。しかし、あくまでも現時点までで松田が認識している、被団協文書を整理することの意味を申しておきます。

１点目は、機関誌や内部通信文書の保存です。整理の過程で、『被団協連絡』といった基本的な史料ですら、現時点ですでに欠けている号があることがわかりました。しかしいまなら、欠号状況が分かれば、各関係機関に問い合わせることで補うことも可能です。冒頭で申し上げたような状況〔引用者注：被爆者の数が年々減り続け、活動を休止する団体も出てきている〕にある以上、今がまさしく「ラストチャンス」だと思っております。また史料整理をやってみて分かったのは、各県や各地で原爆運動をやっている大小さまざまな団体が数多く存在し、そうした団体の機関誌やパンフレットが大量に被団協に送られてきているという事実です。被爆者運動は広島、長崎、あるいは東京だけの運動ではないことが実感できます。被団協には断片的にしか存在していない各団体の史料も、被団協文書の史料目録が出れば、史料が存在しているという事実を共通認識として持つことができます。そうすれば、欠号を補おうとか、場合によってはデジタル化して保存しようといった動きも出て来るのではないかと思います。

２点目。この文書群は、戦後の言論空間において「運動の言葉」がどのように練り上げられたかを豊かに指し示してくれる可能性があるということです。たとえば自ら被爆者として国連で演説し、昨年亡くなった山口仙二氏の演説原稿は第１稿から第４稿（完成稿）まで存在していますし、「基本要求」を作っていく過程での 20 数回の書き直しも残されています。当時刊行された史料、されていない史料双方を解読することで、「運動の言葉」の変遷を非常に高い密度で追うことが可能となるでしょう。それはまさしく歴史学の仕事です。

３点目。被爆者に対する各種アンケート調査の結果を調査原票にまでさかのぼってみることができるということです。被団協によせられた被爆者やその家族の生の声は、まさしくここにしか存在しない「一点物」の史料であります。今、整理・保存しなければ、その声は永遠に失われると考えると、胸が引き締まる思いがします。

現在、戦後史料は次々と整理されています。運動の側だけではない他の史料群ともあわせながら被団協文書を読むことで、どのような戦後の歴史像が描きだされるのでしょうか。現在進行系で進んでいる、戦後を歴史的に捉えようとする試みにとって、この史料群の存在は大きな価値があると思います。」

Ⅳ．ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐネットワークの報告とお知らせ

７/１９（土）ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐネットワーク第２回作業日は８名、８/２３（土）第３回作業日には７名の方が参加しました。

これまでに寄せられた聞き取り記録（聞き取り票）の中から、原爆の被害・被爆者の思いが伝わる特徴的な部分の抜粋・編集するなど、被爆７０年・ＮＰＴ再検討会議に向けた報告書の作成を進めました。また、１２月に予定している「ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐつどい」の内容についてアイディアを話し合いました。

【ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐネットワーク第３回打合せのご案内】

１）日時　２０１４年9月６日（土）１４：００～１６：００

２）場所主婦会館プラザエフ５F会議室

３）内容

①各地の取り組みの報告

②被爆７０年、ＮＰＴ再検討会議に向けた報告書について

③ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐつどい（１２月）について

④web サイトでの情報発信について

⑤第４回作業日、第４回打合せの日程

⑥その他

グループ、個人どなたでも参加できる、各地の取り組みを結ぶゆるやかなネットワークです。多くのみなさまのご参加をお待ちしております。参加される方には事前に資料等お送りいたしますので、継承する会事務局の島村までご連絡ください。

【参加申込・お問い合わせ連絡先】

ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐネットワーク事務局
ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会（島村まで）
Ｅメール：　shimamura_kiokuisan@yahoo.co.jp
TEL/FAX ：　03-5216-7757

Ⅳ．継承の取り組みのご紹介（第８回）

（１）東京高校生平和ゼミナール　7/13（日）丸木美術館見学

高校生平和ゼミナール世話人　中出律

参加者・・・高校生が 15 人、世話人が 10 人で、計 25 人でした。高校生の数が予想より多くびっくりするとともにうれしかったです。

証言して下さったのは、しらさぎ会の会長であり、かつ日本被団協の事務局長の田中熙巳さん（82 歳）です。田中さんは意外にも丸木美術館に来たのは初めてとのことでした。巡回展で丸木夫妻の絵は勿論何度もご覧になっていたとのこと。
2 時 40 分から、館内の小高文庫（丸木夫妻の晩年のアトリエ）で、1 時間にわたって田中さんの証言をお聞きしました。その後質疑応答がありました。ほとんどの高校生が感想を書いてくれました。「あらためて戦争はいけないものだとわかった」、「初めて被爆者の体験を聞き、美術館の原爆の図を見て想像をはるかに超えた戦争のむごさがわかった」、「貴重なお話がきけて、幸せに思った」、「自分が知ったことを同世代の人に伝えていきたい」などみんなまっすぐ考えていたことを心強く思いました。
原爆の体験をお聞きしただけでなく、田中熙巳さんという人生の素晴らしい大先輩の姿に接することができた高校生達は幸せだなと思いました。

【高校生の感想】
● 被爆者の方のお話をきくのは 2 回目で改めて、生の声はちがうと思いました。どれだけ戦争や原爆がひさんなことなのかがよくわかりました。こうやって、自分が貴重な経験ができていることを幸せに思います。戦争って一言でいっても、つらいことがたくさんあって、終わったあとも、苦しみを残していくんだと怖いと思いました。こんな風に自分たちに話をしてくれる被爆者の方の気持をひきついで、今の日本が向かっている先を、変えたいと思いました。　U.　S（高校 3 年）
● 初めて被爆者の方から直接お話を聞けて良かったです。当時のリアルな状況をきくことや田中さんの戦争を体験しての想いや考えを聞けたのは貴重でした。私を含め、今の若い人たちは質問をすぐ言うことができない、考えることができない、しないという言葉が強く残りました。話をきくことと同時に自分はどう思うか、どう考えるかをしっかり言葉にできたら良いなと思うし、したいと思いました。そういうことができなければ戦争をとめることができないと思います。そして、それを言葉 や行動に移していくことが大事なんじゃないかと思います。　N.　S（高校 2 年）

（2） ＪＣＣＵ協同組合塾　7/31「ヒロシマ・ナガサキを聴き、語り、受け継ごう」

ＪＣＣＵ協同組合塾共同代表　三崎敬子

「ＪＣＣＵ協同組合塾」は、2009 年に日本生協連の職員有志が作った自主グループで、労働組合の活動補助を受けながらこれまで賀川豊彦や生協、協同組合について年に３～５回の学習会を重ねてきました。日本生協連職員有志の勉強会ではありますが、塾のブログなどで企画案内は公開して外部の方と一緒に学び交流できる場になっていて、そのよさも大事にしてきました。(ブログ名：「ＪＣＣＵ協同組合塾」
http://jccu2010.blog130.fc2.com/)
昨年度第 1 回例会(2013 年 7 月)で「生協の平和活動の歴史とこれからの課題」について学び考えました。日本生協連、日本生協連労働組合はともに「ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会」の賛助団体になっており、「ヒロシマ･ナガサキを語り、受け継ごう」と

いう共同行動に取り組んでいます。しかしながら、平和の取組みに参加している人でも「被爆者の方のお話はヒロシマ・ナガサキに行かないと聞くことができない」と思われている方が多いことが、この間にわかってきました。そこで今年度第１回例会は、昨年に続く平和のテーマで、地元東京の被爆者の方々のお話を少人数のグループに分かれてじっくりと聴くという企画にしました。

被爆者の方々（柴田フミノ、仲伏幸子、奥田豊治の３氏）を東京都原爆被害者団体協議会（東友会）にご紹介いただき、２つの部屋で３グループに分かれて証言を聞き、語り合いました。昨年７月の例会に参加された大学生協の方のお声かけで大学生協連学生委員会メンバー４名の若者がご一緒に参加してくださり、日生協労組書記局からも小学生のお子さんたちと一緒に参加いただく参加者もありました。受け継ぎ手の側の参加者の年齢層は１０代から６０代以上まで幅広く、ご証言をいただく３名の方を含めて２７名の参加を得ての開催となりました。

まとめの全体会では、それぞれのグループからの簡単な報告があり、今回のように被爆者の思いも含めて受け継いでいける場をたくさん作っていくことの大切さを共有化することができたと思います。日本生協連労働組合の小笠原委員長もご参加いただいたので、この場で感想とともに労組の平和の取組みの現状と決意表明もいただきました。

今回のご証言も、３人の記録係によってきちんとまとめてノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会にお届けし、次世代と世界に伝えるために活用していただくことにしています。このような企画を今後も年に１回は続けていけるようにしていこうと思っています。

《参加者の感想文より》（感謝の言葉は割愛します）

【Ａグループ】　証言者：柴田フミノさん

<u>（２０代・女性）</u>　よく「直接話を聴ける最後の世代」と言われていて、その中でも自分には何ができるのだろうと考えています。そして今日、柴田さんのお話を聴いて、次の社会を担っていく世代として行動していかなければならないと思いました。“戦争は人殺し”ということを柴田さんが「伝えたい」と思った気持ちを今度は私が「伝えていきたい」です。これから大学生を相手にする仕事につくので考える場も作っていきたいです。どうかお元気で。

<u>（２０代・男性）</u>　あらためて話を聞くことで込み上げてくる想いがあることを想い起こさせられました。同じ過ちをくり返さない世の中にしていくため、辛いとは思いますが、より多くの方に言葉を伝えていただければと思います。私たちもそのような場をこれからも設けていけるよう努力をしていきます。

<u>（４０代・男性）</u>　柴田さんのお元気な姿に被爆でつらい思いをされた方とは思えず、こちらが元気づけられました。後世に語るのは使命との言葉が印象に残っています。悲惨な話はしたくないという気持ちがあるが、若い人に話をした方がいいとの思いで話をされている姿に、自分たちも戦争のない世の中にするためにしっかり伝えていきたい。

<u>（６０代・女性）</u>　柴田フミノさんのお話は、大変率直で淡々と当時のことを語られたので

すが、お兄さん、お母さんが次々と原爆症で亡くなられたことはすごい体験だったと思います。何度も「戦争はイケナイ！！」とくりかえされたお気持ち、それだけの思いで今の語り部をしているとおっしゃったことにインパクトを受けました。若い人に伝えたいという使命を抱いて毎日を生きていらしていることに勇気をいただきました。

【Ｂグループ】　証言者：仲伏幸子さん
（１０代・男性）　話をきいて大変だったんだなと思った。いろいろな人がぎせいになって悲しいことだと知った。次の世代に伝えなければいけないことだなと思った。いろいろなことを知れていい機会になったと思った。
（１０代・女性）　子どもには少しむずかしかったけど、これから生まれる未来の子どもたちにも伝えていきたい。
（２０代・女性）初めて語り始めた時、その頃の自分に戻らないと語れなく、その頃の自分に戻ると必ず母が出てくる。それがつらく語ることができなかったというお話が印象的でした。ノーモア・ヒバクシャの事務局の方から被爆をされた方すべてが語れるわけではなく、語って下さる方も自身の人生を開いて伝えて下さっている、その覚悟を受けとめてほしいと言われたことを思い出しました。
（５０代・男性）　加害者への思いを問われた時、そこから平和への道すじはない、とお答えになられたことに感銘を受けました。最初、お話をされた頃、５歳９か月の時の記憶をたどらなければならず涙で何もおっしゃれなかったとの由ですが、そのような辛い思いをおして、お話をされるエネルギーを、私たちは受けとめ、伝えていくことの大切さを感じています。

【Ｃグループ】　証言者：奥田豊治さん
（２０代・男性）　証言を聞くときは当時の雰囲気がかなり伝わってきて、お話を聞く機会は大事だと思った。どのようにして若い世代に広めていくか、しっかり考えたい。
（３０代・男性）　過去に被爆の証言を聞いて感じたことを手紙に書いて伝えるという分科会に参加したことがありますが、その時に被爆経験者の話を言葉や文字にして伝えることの難しさを思い知らされた次第です。今の広島、長崎の姿から被爆当時を想起することは困難ですが、きちんと現場に行って、私よりさらに若い世代に語り継いでいきたいと思います。核はやはり人類と共存できません。このような悲劇は二度とくり返したくないです。そのための努力をこれからも続けていきたいと思います。
（５０代・男性）　今日、聞き学んだことを自分の中で消化し、まわりに伝えていきたいと思いました。奥田さんの話されていた、広島の街が「ベチャッと押しつぶされた」「なんとも言えないひどい臭いがした」という経験者に感じることができない感覚を聞くことができた。理論と共に、感情や想いも伝え、核兵器廃絶の運動を広げ、実現に近づけたいと思いました。
（６０代・男性）　原爆投下後の状況が、絵をみるようにリアルにイメージできた。こう

した悲劇、地獄をどうしたら二度とくり返さないようにするかが大事と思います。

（３）Peace Now! Hiroshima 2014　児玉様からの講演を受けて

全国大学生協連　学生委員
Peace Now! Hiroshima 2014 実行委員長　井上恵里

私たち全国大学生協連では、例年Peace Now! Hiroshima・Nagasaki・Okinawaという３地域、各３泊４日で行う平和に関するセミナーを行っています。そのうちの Peace Now! Hiroshimaでは今年、被爆者講演として児玉三智子様にお話をしていただきました。

プログラム上では児玉様からのお話は２日目の夜でした。２日目の夜までで、参加者は平和記念資料館の見学と碑めぐり、テーマ別(「被爆建物」「復興」等)のフィールドワークを終えていました。原爆の影響について基本的なことを学んでからの被爆者講話でしたが、参加者にとって、児玉さんから聞いたお話はとても印象に残ったようでした。

(参加者の感想抜粋：２日目感想記入用紙より)

●被爆者として国が国民の命を守るということは信じられないという言葉がとても印象的でした。国は国民を守ることが仕事だと思っていたので衝撃的でした。(３年・男子)

●印象に残ったのはあの原爆の雲の下に発生した非常に悲惨の事です。留学生ですから、原爆のことは教科書でひとつの歴史事件として覚えました。しかし、児玉さんの言ったように、雲の下に発生したことはあまり知りませんでした。今日の貴重の機会で、原爆のことを被爆証人の人から聞いて、非常にいい経験だと思います。(留学生・男子)

●資料で見るよりも、当時のものを見るよりも、心にささるようなものがあった。その方の表情や声を聞きながら当時のお話を聞くことは、とても、リアルに頭に浮かび、苦しく、辛かった。しかし、話してくれる方もとても辛いと思うので、その苦しい過去を振り返ってもらってまで、話してくださり、それを聞いた私たちは、やはり、生の声を聞ける最後の世代として、様々な人に伝えていかなければならないと思った。さらに、原爆の被害やその事実は、過去のことではなく、今も続いていることなんだということを初めて知った。私たちはもっと当時のことを深く考え、学び、現在も続いている苦しみを抱えた人々の想いがあることを忘れてはならないと思った。(１年・女子)

●被爆者の証言は２日間の中で一番、当時の情景を想像させてくれる物事でした。こんな力強い証言がいずれなくなってしまうと思うと、不安で仕方ありません。自分が何ができるか、はっきりわかりませんが、少なくとも自大学の多くの人に知ってもらえることをしたいと思っています。(１年・男子)

●被爆者の方の差別の話は自分の想像を超えるひどいものだった。資料館で見るだけよりも、実際に被爆者のお話を聞くと、被爆者の方の声や表情によってもっと原爆のひどさがわかった。最後の世代と言われる理由がわかった。資料館などではない、自分の耳で聞く

ことが大切だと感じた。（３年・女子）
●今の時代はほしい情報が得られるので、ネットでも本でもビデオでも証言を聞くことができるが、直接被爆者の前で表情や声を目の当たりにして聞けるのは最後の世代だと聞いて、そう意識したらとてもありがたいことだと思った。さらに言うと、自分が別の誰かにこの話を伝えることも有難いことになりうると思ったので、責任を感じた。（２年・男子）

被爆者講話までのプログラムで雨に濡れ、外を歩きまわり、とても疲れているはずの参加者でしたが、みんなとても真剣に話を聞いていました。１時間半ほどの短い時間でしたが、上記の感想からも、参加者が様々なことを学び取ることができたのがうかがえます。
児玉様からの講演の後は班別に分かれて感想交流を行い、そのうちの１班には児玉様にもご参加いただきました。質疑応答で聞ききれなかったことを質問する参加者もいて、とてもよい学びとなったようです。その後の全体感想交流では、手を上げた参加者は感想だけでなく今後自分たちがどのように行動していきたいのかまで発言していました。児玉さんからの、行動はまずは続けられる小さなことでもいい、という言葉に励まされていたようでした。
４日間のプログラムが終了しての感想・決意表明では、「(大学生協の)組合員に発信していきたい」「まずは家族とこの話をしたい」「(留学生が)学んだことを国に持って帰って家族や友人に伝えたい」等、語り継がれた最後の世代として発信していくことを重点に今後とりくんでいきたい、という声が多くありました。原爆が落とされたあの日から時がたち、情勢も変化し続けてきていますが、また同じような惨禍を絶対に繰り返してはいけない。そのような想いで、参加者一同、各大学生協に戻ってから、個人として、また大学生協の組織委員会の一員として活動を行っていきたいと思います。
来年の 2015 年は NPT 再検討会議があります。戦後 70 年という節目、全国大学生活協同組合連合会としても、組合員の声を集め、被爆者の方をサポートするスタッフとして５名程の派遣団をニューヨークに送る予定でおります。これは大学生協の平和活動の一環として位置付けられています。大学生協では、第一次世界大戦で一時解散し戦争で経験した苦しみを繰り返さないよう、「For Peace and Better Life」をスローガンに、そして「知り、知らせ、考え、行動する」を指針として持ち続けてきました。今後もこれらを大切にして取り組み続けていきたいと思います。
改めて、児玉様、および児玉様をご紹介くださいましたノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会、日本被団協事務局には感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

Ｖ．≪紹介≫この夏の出版から

被爆６９年のこの夏も、ヒロシマ・ナガサキを伝える様々な本が出版されています。そのなかから、当会にも関連の深いいくつかをご紹介します。

◆ 宇吹　暁著『**ヒロシマ戦後史——被爆体験はどう受けとめられてきたか**』(岩波書店、定価：2,800 円＋税)

広島で長年、原爆資料の収集・研究に携わってきた著者が、その膨大な資料を駆使して著した本書は、「戦後の広島で展開した「被爆体験」と、国内外で展開した広島の「被爆体験」を「ヒロシマ」と表現し、その七〇年に及ぼうとする歴史を簡潔に描き出そうとした」もの。藤居平一・日本被団協初代事務局長が運動の中で目指した「庶民の歴史を世界史にすること」という言葉の継承者たらんとする著者の、静かで熱い志が感じられる本書は、被爆７０年の節目を前に「ヒロシマ」をふり返り、向き合うための恰好の手引きになるでしょう。

◆ 西橋正泰編『**ＮＨＫラジオ深夜便　被爆を語り継ぐ**』(新日本出版社、定価：1,600 円＋税)

著者は元ＮＨＫアナウンサー、当会賛助会員。被爆者との出会いはＮＨＫ山口放送局時代（２０代）に遡ります。現役時代に数々の番組制作を手がけただけでなく、定年後（1998年～2012 年）アンカーをつとめた「関西発ラジオ深夜便」でも多くの被爆者をインタビュー。その中から８人の話を収録した本書からは、林京子、山口仙二、山田拓民…といった、私たちにとって知る機会の多い被爆者たちの、すぐれた聞き手によって引き出された素顔の言葉が聞こえてくるようです。

◆ 堀田シヅヱ 証言／竹内良男 編集・構成『**済南・広島・鴻巣… — わたしの歩んだ道 —**』（定価：1,500 円＋税）

94 歳の今なお、戦争（看護婦として北支派遣軍の病院兼務）と広島原爆の記憶を語りつづける堀田シヅヱさん（埼玉）の自分史。聴き取り・編集に協力した竹内さん（当会正会員）が記憶の正確さに驚いたというほど、その内容は具体的で生き生きしています。後半には、被爆医師・肥田舜太郎さんとの対話「広島と福島をつなぐもの…」も収録（ＤＶＤも添付)。初版 500 部はすでに完売し増刷中。

申し込みは、代金 1,620 円（税込）と送料 84 円（計 1,700 円）を添えて堀田さんへ。〒356-0038　埼玉県鴻巣市本町６－１－１０